**寄　稿**

**マードック小説の冒頭部分**

**駒沢　礼子**

　以前受けたことのある英文学の試験に、「次の各文は小説の冒頭部分である。適当と思われる題名を下群より選びなさい」という問題があり、面食らったことがある。このことがきっかけで、読書の折は冒頭部にこだわる読み方をするようになった。小説のみならず映画や音楽でも快い滑り出しなら、我々はそれに乗りやすいものである。そこで書き出し部分に焦点を当てて、マードック作品の私流の読み方を述べてみたい。

　一番多い書き出しは、登場人物のセリフで始まるものである。Nuns and Soldiers （1980）では、臨終を前にした老人が「ヴィトゲンシュタイン―」「ヴィトゲンシュタインは、人間は月に行けそうにないと思っていた」などと不可解な言葉を話し、読者は迷路に誘い込まれる。この小説では、尼僧達は無垢を軍人達は名誉を求める姿つまり真理や善を求めてやまない人間が描かれている。ヴィトゲンシュタインの言う「月」を、人が近づこうとしても簡単には到達できない「真の目標」の象徴とすれば、冒頭部の謎の言葉は作品全体の暗喩であると思われる。意味ありげなセリフで始まる作品はこの他に、A Severed Head (1961), The Unicorn (1963), A Word Child (1975), The Book and the Brotherhood (1987) など枚挙に暇がない。

　また、物語の舞台となる場所の全景の描写で始まる作品もある。もし映画化されるなら第一場面としては最適である。The Italian Girl (1964)やThe Sea, the Sea (1978) がこれに該当する。前者は、主人公エドマンドが母の死の知らせで夜中に帰郷するところから始まる。彼は版画家であり、第一章はA Moonlight Engravingと称され、月光に照らされた家や木がシルエット形式で描写されているのを見ると、まるで版画の画版のようである。物語の大筋は、我執の強い登場人物がある事件をきっかけに全てをあるがままに受け入れるに到るのである。マードックの「プラトンの洞窟の比喩にあるような太陽の光のもとで見なければ、真の存在は見えない」というテーマに照らし合わせてみると、冒頭の月の光による影の表現は彼女のテーマの裏返しの表現にあたる。

　書き出しの第三は、An Unofficial Rose (1962) に見られるような詩歌の引用である。R. Brooke の詩「野バラ」に続き、ヨハネによる福音書第11章25 節の引用で幕が開く。バラ育種家ランドルは、妻アン（野バラの象徴）を捨て愛人リンズイ（改良バラの象徴）と逃亡するが、迷妄のどん底に陥って初めてアンの良さに目覚める物語である。冒頭部は無意識のうちに自我を捨て、ひたすら素朴に善であろうとするアンのメタファーである。

　第四には、二重の意味を持つ文から始まる作品が挙げられる。Henry and Cato (1976)の書き出しは「ケイトはハンガーフォード歩道橋を三度行ったり来たりしていた」である。表面的には神父ケイトが拳銃をテムズ川に捨てる為の場所を探して橋上で行き来する状況であるが、信仰に自信を失い聖と俗との間で苦悩する様子の暗示と受け止められる。結末まで読んでみて最初の文には二つの意味があることに気付く。もしかして作者は結末を先に決めておいて逆算して冒頭部を設定したのでは? との推測も否定できない。Bruno’s Dream (1969)でも同様のことが言える。

　このように書き出しにこだわってみると、読者を自分の世界に誘い込むマードックの努力や、作品解読のヒントが伺え、この読書法も悪くないと思っている。